

JAMの主張

コロナ後の社会について議論を始めよう！ 市民の権限強化と世界の結束こそが重要

【機関紙JAM・2020年6月25日発行 第257号】

中国・武漢で感染が始まったとされる新型コロナウイルスは全世界へと拡大している。世界銀行が公表（6月8日）した2020年世界の経済成長率は、マイナス5.20%で統計が確認できる1960年以降では初めてマイナスとなった。累計感染者数（6月22日時点）は、741万510人、死亡者数は41万8294人に上る。

「そもそも人類は、『人間至上主義（＝人間の生命こそが至高であるという考え）』を実現するために、長い歴史の中で『飢饉』、『疫病（感染症）』、『戦争』という三つの克服に注力し、人類はこれを首尾良く抑え込んできた」。こう述べるのは、ベストセラーとなった著書「サピエンス全史」で、人類発展の歴史を説いたイスラエルの歴史学者、ユヴァル・ノア・ハラリ氏である。

「新型コロナの嵐はやがて去り、人類は存続し、私たちの大部分はなお生き残るだろう。そして今回の危機で、私たちは特に重要な二つの選択に直面することになるだろう。一つは『全体主義的な監視』と『市民の権限強化』、もう一つは『国家主義的な孤立』と『世界の結束』のいずれを選ぶのか」とハラリ氏は、人類へ問いかけている。

私たちJAMは、理念と行動理念の中に、「人間尊重を基本に、働く者の諸権利・自由と民主主義が保障され、社会的な不公平のない平等な社会の建設」。さらには、「責任ある国際協力を通じて、国際平和の実現」を謳っている。このことから、ハラリ氏の問いかける「重要な二つの選択」については、必然的にそのいずれもが後者の選択、つまり「市民の権限強化」と「世界の結束」になる。

新型コロナウイルス感染症の蔓延・拡大によるグローバル規模での分裂・分断が、人類にとって重大な危険をもたらすことを肝に銘じておく必要がある。

コロナ禍以後の新たな「職場」、「組織」、「社会」の在り方について議論を始めよう。

書記長 中井寛哉